

---

# You are the one

高宮 かしお

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

You are the one

### 【Nコード】

N9235T

### 【作者名】

高宮 かしお

### 【あらすじ】

新薬研究中に妙なガスを吸ったルイ。彼が目覚めると……自分が犬になっている事に愕然とする。恋人のまどかはその犬がルイとは知らず、上司に頼まれ”犬”を預かることになった。もともと犬系男子の爽やか本気犬ライフ……幕開けです！注）この作品は筆者の完結済み作品”Elysim”から「ルイxまどか」のカップリングの番外編となっております。Elysimを読まれた事のない方でもお楽しみいただけるように努力いたしました。なお、R15ですが、乳<sup>チチ</sup>の描写は細かいかもしれません。そういうのが「お

ぞましい！」「と感<sup>じ</sup>る方は「遠慮<sup>く</sup>ださい。自己<sup>じ</sup>サイト」かしお乃「  
にも同時<sup>じ</sup>掲載<sup>けい</sup>です。

## 第一話 変身

最近、恋人のまどかがご機嫌斜めだ。彼女はまあ、言うなればオレの我がままで仲間と別れてまでこの星イリア・テリオに残ったが、ここ半年程なんとか平穩無事にやっていた。

その彼女が昨日、腰に手を当て頬を少し膨らませながら、オレに言った。

「ルイのしている仕事は大事だつてわかってるけど、なんでも自分一人でやり過ぎなのよ。ここところ、全然一緒に出かけて無いじゃない」

オレだつて何も彼女との甘い時間を犠牲にしてまで仕事なんかしたくない。（夜のお楽しみに割く時間はあるんだが）

しかし、だ。今キマイラの間で流行っている病原菌に対する薬を一日も早く完成させるとの指令。雄の抗体は出来たが、雌のほうはあと少し調整をしなければいけない。キマイラはとてもデリケートな動物で、雄と雌の体で同じ薬でも効き目が違ってくるのが厄介だ。

今日も専用の研究室で一人地味に勤務中。

小振りのキャップ試験管に少しずつ濃度の違う薬品を準備し、ひとつひとつに弱めた菌を入れていく。パチ、パチ、とキャップを閉める。最後の一本を閉めるときに、その試験管だけがほのかに熱を持っているのに気がついた。そして、ガスがゆらりと立ち上ったのを眼鏡のレンズ越しに見た。嫌な予感……刹那、ぐらりと視界が歪んだ。体を支えようと椅子の背に手を伸ばしたが、手は届かず、虚しく宙をかいた。右肩を床にしたたか打った痛みを感じたが、そこで幕が下りた。

う……

頭が少し重かったが、起きられない程ではなかった。どのくらい倒れていたのか。少し離れた床の上に眼鏡と、試験管が散らばって落ちているのが見えた。自分がどうして床の上に倒れているのかは記憶にあつた。大丈夫だ。一時的なものだったのdarou。

オレは体を起こした。肩が鈍く痛んだが、大したことは無い。

あれ？

視界が低いんだが。起き上がったはずが、デスクの上がやつと見えるくらいだった。

さっきのガスで視神経が狂ったのか？

オレは眼鏡を取ろうと手を伸ばし……………視界に入ったおぞましい物を見た。

『きゃ—————!!』

という悲鳴はあげなかったものの、一瞬凍り付いた事は認める。

黒っぽい毛に覆われた、動物の手、否、足。強いて言えば”犬”の。オレは嫌な予感を胸いつばいに、それでも夢であることを祈りながら、ドアの前へ向かった。カチカチカチと床に爪が鳴った。鏡のように磨かれたドアがオレに見せた物は、つややかな毛を持つ中型犬だった。その体はぶかぶかの白衣に包まれていたものの。

ポーターコリーってこんな感じじゃなかったか。

つい最近まどかが借りて来たフィルムは、豚が主人公の話で、そこに出てきた牧羊犬がその種類だと彼女が言っていたのを思い出した。つて、納得している場合じゃねーだろ。

オレは白衣コートの下から這い出し、ポケットに鼻を突っ込みピースを歯

に引っかけると部屋を飛び出した。つるつるの床で足が滑り、角を曲がるたびに勢いでバランスを崩した。階段を駆け上りシャムの部屋の前まで来た。

……しまった、届かねえっ！

オレのピースはアポ無しでもこのドアに対応できるようになっていたが、何しろ、ピースを当てるボードが高い！  
不覚！ 犬、不便！！

オレはどうしたら中へ入れるか、くるくるとドアの前で回りながら考えた。そのとき、タイミングよく中からミケシユが出て来た。彼女の脇をすり抜けオレは中に飛び込んだ。

「わ！ 何?! 犬!!! こらっ!」  
捕まえようと伸ばされたミケシユの手は、オレの尻尾をかすっただけだった。

「何? 犬?」  
シャムはデスクの向こうからオレの姿を認め、さも嫌そうに眉を寄せた。

「誰だ? 犬を入れたヤツは。ミケシユ、早くつかまえてドームにでも入れておけ」

オレはミケシユの手をかいくぐり、シャムにピースを放った。ヤツは片手でその金属片を受けると、手のひらを開いてそれを見た。

「……なんで、ルイのピース? おまえ、まさか……?」  
「ばふっ」

オレは「そうだ」と言っただつもりだったが、出て来たのはやはり犬の鳴き声でしかなかった。

シャムは可笑しさに顔を歪めながらオレに近づき、跪いた。

「なんだよー、ルイ、おまえワンたんになっちゃったんでちゅかー  
ー」

そして、ひとしきりゲラゲラ声を出して笑った。

オレはこの美麗な幼なじみが大嫌いだ。

ミケシユは訳が分からないといった顔でデスクの前に突っ立っていた。

「ミケシユ、リキ呼んで。あいつイヌ科だから、こいつの言うこと通訳出来るだろう。一応この哀れなルイの言い分を聞いてやらんな」

リキというのはユランから今回の治験の為に呼んだキマイラだった。今は発情期だからヒトの姿になっていて、その時期の研究をするためにその期間中は部屋をあてがい、なかなかの待遇でケアされている。

「ええ？ その犬ころがカネラ・イルマですか?! 長官、冗談は休み休み言ってくださいよ」

ミケシユはウェーブのかかったふんわりとした髪を振って大きなため息をついた。

「冗談かどうかはリキが来れば分かる。早く呼んでくれ。あ、賭けてもいいぞ?」

「いや、遠慮しておきます」

ミケシユはパルスを耳に当て、リキを呼ぶよう指示を出していた。聴覚がかなりよくなっている。

大して待つ事も無く、ドアはリキの訪問を知らせた。オレも何度か研究室に呼んだことがあるが、彼はなかなかの美青年だった。やや赤みを帯びた灰色の髪を持つ、細面の輪郭をした男だった。瞳にはいつも通り、何の感情も現れていなかった。

「御用は……なんでしようか」

リキは控えめに、低い声で言った。

「うん、この犬の通訳をして欲しいんだ。彼の話をちょっと聞きたくてね」

シヤムがそう言うとりキは始めてオレの方を見た。そして話しかけた。

「君は何を伝えたいの？」

オレは事の経過を手短に話した。そしてリキはそれをシヤムに言葉のまま伝えた。シヤムが聞き終わったところで、リキはもう一度オレを見下ろした。その瞳に始めて感情が沸き上がっているのを見た。同情の色を持ちながら、また楽しんでいるようなそれを見た。

聴覚でばかりでなく臭覚までよくなったか、それが鼻についた。

「ふーん、そうか。じゃあ、クルーを何人かルイの部屋に送って、さっそく解毒剤を作らせなきゃな。って、おまえが本当に元に戻りたいのかわからないけど」

ぷっ、とミケシユが横で吹いた。オレはぎろりと睨んだが、ヒトである時よりも効果はなかったと言っている。

「カネラ・イルマ、あなたは元の姿に戻りたいのですか？」

オレはリキが冗談で聞いているのかとその顔をまじまじと見上げた。が、彼は真摯な視線をオレに投げかけていた。

「わふっ」

「長官、カネラ・イルマは元の姿に戻りたいそうです」

シヤムは呆気にとられてオレたちのやりとりを見ていたが、我に帰ると、「あ、ああ、そうだろうな」と軽く頷いた。

「じゃあ、クルーの方に指示しておきますね」

ミケシユはそういうと、一礼して部屋を出て行った。後ろを向いた、その肩が細かく震えているのをオレは見逃さなかった。

「さーてね、おまえ、ご主人様呼ばなきゃだめだろーね。一人で家に帰れないだろ。まどか、ビックリするだろうなあ」

シヤムが腕を組んだまま、デスクに尻を預けた。

『おい、なんでまどかがご主人様なんだよ。ポジション間違ってるか』

「長官、僕への御用はお済みでしょうか」

オレは再びリキを仰ぎ見た。その目尻がほんのり染まっていた。

『なんだ？』

オレは不審に思ったが、それがなぜなのか答が出る前にシャムは短く言った。

「ああ、ご苦労だったね。下がっていいよ」

リキも一礼してきびすを返した。オレには一瞥もくれなかった。

「お呼びでしょうか」

リキが去った後、シャムはすぐにまどかを呼んだ。「至急ね」と付け加えたからか、まどかは息を切らしていた。丁度帰るところだったらしく、制服ではなく、フェミニンなカットのシャツにワイドパンツという格好だった。

改めてなんて可愛いんだ。オレの彼女は。ワイドパンツなんて、スタイルが良くないと野暮っただけだからな。ていうか、やっぱり世界が白黒だな。犬だけに。あのシャツはたしかサーモンピンクだったよな？

「あれ、犬だ。長官の犬ですか？ カワイイ」

彼女はシャムの横におとなしく座る犬、つまりオレに気がつくとかがんで目線を同じ位置に下げ頭を柔らかく撫でた。まどかの手、気持ち良すぎるんだけど。

オレのしっぽは自然にぱたぱたと絨毯をこすった。

「いや、私の犬じゃなくてね、大事な知り合いに犬を預かって欲しいって言われて」

『はあ?????! 何言ってるんだ、シャム!!! オレがルイだと

「なんで言わない?!」

シヤムを見上げると、嫌らしい目つき、口の端がにやにやとだらしなく歪んでいる、何か企んでいる時特有の表情を浮かべていた。

「でも、私のうちには猫がいてね、どうしても預かれないんだ。だから、迷惑を承知でまどかをお願いしたいんだが」

「え、と。私は大丈夫ですけど、イルマ教官に聞いてみないと…」

「な、な？ そりやそうだろ。さすがまどか。さあ、シヤムどうする。ルイに聞かないと、って言ってるぜ？」

オレは内心にやにやしてシヤムを見ていたが、落ち着き払ったヤツの次の言葉に愕然とした。

「あー、ルイね、それが午後、ユランで緊急事態が起きたから至急飛んでもらったんだ。彼くらい技術者じゃないと解決出来そうに無かったんで、かなり辺鄙な場所へんびでね、電波も不安定だからなかなか連絡がとれない。でも、一週間もしないうちに戻ると思うから、それまでルイの代わり、と言っちゃ彼に失礼かな。その犬を預かってもらえると大変助かる。それに彼は『まどかを頼む』ってちゃんと私に念を押しに行ったから」

「なんだか、”ルイ程の技術者”だとか、”電波も不安定”だとか、”大変助かる”だとかやけに強調されている気がしたのだが？ 誰が誰にまどかを『頼む』だと？ そんな状況でも絶対におまえには頼まん。」

「ああ、そういうことですか。じゃあ、大丈夫だと思います。ルイも犬が好きです。ていうか、彼も犬っばいですしね」



「ああ、心の狭い男を恋人に持つと君も苦勞が絶えないね。私も彼の性格は長い付き合いでよく知っているけど、もう少し寛容でもいいかと思うんだ……まあ、でも考えておいてくれたまえ……っつ！」

シヤムは握っていたまどかの手を振りほどき、体を離れた。

「うわ、いてっ！ 幼なじみを噛むヤツがあるか！」

オレは思いつきりシヤムの足首に噛み付いてやった。

「幼なじみ？」

まどかは首を傾げた。

「い、いや、この犬、まだ子犬だった時から知ってるからね……」

おい、放せ！」

まだスラックスの端に齒を食い込ませているオレを、シヤムは足で払った。

「と、とにかく連れて帰ってくれ。何かあつたらすぐに私に連絡して……」

「うううう……と低く唸るオレの声に、ヤツは最後まで言う事を諦めたようだった。

「おいで、シヨコラ。ご飯買って帰らないとね」

「じゃあ、存分に楽しんでくれ、犬ライフ！」

シヤムがオレたちの後ろから声をかけた。まどかは理解出来なかったのだらう、曖昧な笑みを肩越しに返した。

しつこいようだが最後に言わせてくれ。オレはこの幼なじみとの付き合いをもう一度良く考えなければならぬ。

ほとんど空席のシャトルで中心地まで出る。オレはおとなしくまどかの歩調に合わせて歩く。この辺りで一番賑わっているショッピングセンターに入り、まどかは食品コーナーにまっすぐ足を向けた。

それにしても目の位置が低いと、人ごみは結構怖いな。身長187cmと体高60cmのギャップはさすがに大きすぎるだろ。

それに、たくさんのヒトのにおいが混じって、かなり不快。そのなかでふわりと香るまどかの柔らかな匂いは唯一オレを安心させる。

「ドッグフードなんてウチに無いから、買っておかないとね。どんなのがいいんだろう、好みとかあるのかな？」

彼女はペットフードが並ぶ棚に視線を泳がせながらゆっくり歩いた。

『好み以前に、喰いたくないんだけど。ドッグフードなんて』

「カリカリがいいのかな。それとも缶のソフトタイプ？ 半生もあるよ？」

彼女は目についた物を手に取ると、いちいちオレの鼻先に突きつけた。どうしたらわかってくれるんだ？ オレは彼女の後ろを歩きながら考えを巡らせる。ああ、自分で持ってきてくりゃいい話だ。

「あつ、シヨコラ？！ 待ちなさい！」

オレはすつと彼女を追い抜くと、いくつか棚を通り越して目的の物を見つけた。ふんふん、と鼻をつけ、一番食欲をそそるそのパツクを口にくわえた。追いついて来たまどかにそれを差し出し、しっぽをぱたぱた振った。

「な、何〜？ お肉？ お肉が食べたかったの。贅沢ねえ。贅沢と言えばウチの誰かさんも贅沢なんだけどね」

『え、それ、オレの事?! でも、どうせ喰うならウマイものの方がいいだろう！ 多少高くたって、オレ、かなり稼ぎいいし!』

「ま、作ったものはなんでも美味しいって食べてくれるから嬉しいけどね。あ、お肉好きならシヨコラは魚もしつかり焼けば大丈夫か

な？」

オレは再び尻尾を振った。肉ばかりだとさすがに飽きる。

「それにしても、言ってる事がわかるの？　なんて賢いのかな、君は」

彼女はオレの耳の後ろを軽く搔いた。あ、それヤバい。気持ちいい……………

「じゃあ、いくつかお肉と魚を買っておこう。今日はね、もう鶏肉をマリネしてあるからそれを焼くだけにしようと思って。あ、シヨコラの分はちゃんとスパイス流してから焼いてあげる。味が濃いと病気になるもんね。あー、ルイがいないと献立考えなくていいから楽だわ〜」

『薄味かよ！　で、オレがいないと楽なのか?!』

鼻歌を歌いながら、品物を腰の高さの浮いているカゴの中に入れて行くまどかの後ろを、ダブルでシヨックを受けたオレはしっぽをだらんと下げたまま、付いて行った。

センターから家まで歩いて15分程だ。買ったものはデリバリーに頼んで、まどかとオレは日が沈むわずかな時間の散歩を楽しんだ。みずみずしかった街路樹の葉がばさばさと風に吹かれ、暖色に色を変え始めていた。いつの間に夏は過ぎたのだろう。いつの間にか巡る季節。その変化に気がつかず、そして自分も日々変化している事に置いてけぼりを食う。自分でさえそんな始末なのに、じゃあ、隣にいるものの変化には？

その存在が不変だと信じて驕おごっていないだろうか。相手の気持ちが変わるはずがないと、曲がった確信を持ちながら恋人を抱いていないか。

全てのものは変化するから、美しい。変化しない美しさというの

もある。それでも自分は絶えず変化しているのだから、対象が変化せずとも、その見方は、接し方は自然と変わってくる。

対象が変化する過程、自分の変化する過程。その狭間にあるものが見える瞬間を、心震える瞬間を”感動”というのではないか。

オレが最後に感動したのは、いつだろう。

オレは隣を歩くまどかを見上げた。いつもは見下ろしている彼女の顔は、見上げるとまた違う雰囲気があることに気がついた。シャープな顎の曲線や、目の前を揺れるすつとした指先。丸く盛り上がった胸。膝下に波打つパンツのドレープ。気がつけば、いつも同じ角度から、同じ目線からしか彼女を見ていなかった。

「おなか空いたかな？ ウチはすぐそこよ。気に入るといいんだけど。ただ広いだけなんだけどね」

犬の視線に気がついたのか、彼女は見下ろし、微笑んだ。

その瞬間、自分がものすごく弱い存在に思えた。

オレがずっとこの姿のままだったら。

犬のオレが彼女に出来る事といったら何だろう。守ると言ってもこの牙が役立つのだろうか。彼女に降り注ぐ困難に、解決の手を差し伸べる事すら出来ないだろう。悲しむ彼女の体を包む事さえ出来ない。気の利いた言葉すらかけてやれない。

そして彼女はいつまで「イルマ ルイ」の帰りを待てるだろう。

たとえシャムが、この犬がルイだと種明かしをしたところで彼女はそれを認めるだろうか。認めたとしてもそれがなんだ？ オレと彼女に明るい未来があるわけが無い。こんな犬のために彼女は異世界に一人で残ったわけではあるまい。

もつとまともな男が彼女の前に現れたら？

オレは、男の手を取り去って行く彼女の背に、声枯れるまで吠え続ける事しか出来ないのではないか。

そんな事を考えているうちに家の前まで来た。かなり気分が落ちた。

” おかえりなさい。おや、ずいぶん変わったお姿で”

玄関前の金色の猫のモチーフがいつものように話しかけてくる。このモチーフの中には、以前はヒトだったがまだ天上に昇る準備の出来ていない魂が宿っている。そして、十分に働いてなるべく早く” 上” へ行こうとしている。猫はドアマンとしてよくやっていた。魂だからこそ、犬ではあるが中身はオレの、ルイの魂が見えたのだらう。

「ただいま。ルイは仕事なんだけど、そのかわりお客様。シヨコラよ」

” はあ、そうですね”

『いろいろと複雑なんだよ』

オレは魂に直接返事をした。

” お仕事、いろいろ大変そうですね”

猫のモチーフも、オレにだけ分かるように同情のトーンで答えた。

薄味の鶏のグリルとそれに茹でた芋をボウルに入れてもらい、テブルの脇で食べた。なんだ、薄味でもなんて事無いな。まさか、本当に犬化してるのか？

「さーて、明日は仕事だけど、明日行けば週末だからね。今日はお風呂に入って早く寝よう。それにしても、ルイはメッセージの一つもよこさないって、どういうこと？」

『だ、だから！ 辺鄙へんびなところだから電波が！！』

そのとき、ぴぴぴっとパルスが鳴った。

まどかはテーブルの端に置いたそれに手を伸ばした。

「あ、噂をすれば、ルイ」

『 ”影”、だよ、そこ。……ていうか、マジ?! なんてだよ。オレここにいるんだけど』

あー……シャムのフォローだな。パルス部屋に置きっぱなしだったから。

くすつ、とまどかが笑みをこぼす。

「ねえ、なんて書いてあるか聞きたい？」 心配かけてすまない。一刻も早く片付けておまえを抱きたい。愛してる。おまえがいない世界なんて考えられない” っ。読んで恥ずかしくなっちゃう。なんかルイじゃないみたい」

『 ええ、ええ、オレじゃありませんから。ていうか、シャムもこんな痒いメッセージ送るな！！』

「ルイって、いつもメッセージ、単語でしか送ってこないんだから。もう、暗号かって思う時もあるのよ」

『 彼女にメッセージって恥ずかしいだろ、普通』

もちろんその後はお風呂で”キャツキャ”という展開もなく。ていうか、何を恥ずかしかっているのか普段から無いけどな！

ベッドへ入る前に、下の中庭へ連れて行かれた。彼女は庭の一角を示し、

「トイレはこの隅っこに決めてくれると助かるんだけど」

『そうか！ 犬だから家のトイレ使うわけにいかないよな！ 雨の日も外は嫌だな』

さて、いざベッドにあがろうとオレが前足をかけると「シヨコラは下！」と厳しい一言をもらった。クウ〜ンと鼻を鳴らしてみたが、それで彼女の気持ちが出ることはなかった。なかなかオレの彼女は手強い。

そんなわけで初日、床の上に毛布をたたんでもらい、そこで丸くなる。

『そのうち絶対ベッドに潜り込んでやる』

って、オレいつまで犬でいるつもりなんだよ？ と、自分でツッコミ。

眠りに落ちる前にふと思った。

ああ、オレはまだどの隣で眠るたびに感動している。

まだ、きつと大丈夫……………

## 第二話 オレの噂とオールドパーの伝説

朝飯はトーストにバターを塗ったもの、ハム2枚、それからチーズの入ったオムレツだった。

まどかももちろんオレと同じものを食べた。ただ、彼女はハムは食べないけど。ベジタリアンではないが自分から積極的に、特に赤身の肉は食わないのだ。

オレは普段、パンにコーヒで済みますが、なぜか犬になると腹が減る。というか、食う事くらいしか楽しみが無い。

「さて、仕事に行ってくるけどシヨコラはお留守番ね。ドアは開けておいてあげるから、トイレに行きたくなったらエレベーターに乗って下に降りれば庭に出れるわよ。誰か変な人が来たら噛み付いてね。って、まずウチのドアネコが入れないでしょうけど」

じゃあ、行ってきます。

まどかは軽くオレの頭をナデナデしてエレベーターに乗った。エレベーターボーイであるカエルと挨拶をしながら下りて行った。

『留守番っていつでもね。やっぱりいろいろ気になりますわな』

オレは戻って来たエレベーターに乗り込んだ。これも、ガワはカエルの置物だが、中身の魂がオレに語りかけて来た。

” いいんですか、大人しく家にいないで ”

『 いーんだよ。オレも出勤だ。早く下ろしてくれよ 』

” はいはい ”

カエルが返事をする、エレベーターはすっと動き出した。

シャトルを待つまどかの姿に駆け寄った。彼女はもちろん驚きで目を丸くし

「え〜?! ショコラ! ダメじゃない、出て来ちゃ。に、してもウチのドアネコはなんでこのコを出しちゃったの?! もー!」

『それはオレがルイだから』

「ほら、もうシャトル来ちゃう。今から帰ると間に合わないのに…」

まどかは諦めたようにため息をつく。

「しょうがない、一緒に行こう。そのかわり、いい子にしててね」

『それはもう!』

オレは尻尾をぶんぶん振り回した。

って、なんで管理部に連れて行かれるんだ?!

ミケシユの冷やかな視線に突き刺されながら、オレはまどかの横に座っている。

「すみません、どうしても付いて来ちゃったんで……この子、ドームの裏の空地に連れて行っていいですか」

「ほんつと、しょうがない男ですね、こいつは。金目もずいぶんとこの犬に気に入られたものねー!。ま、いいでしょう。私が見ておきます」

『ええ!!! 嫌だ。オレは遠慮する。ミケシユに一日中監視されるのは!』

すぎるようにまどかを見上げたが、それにも気がつかず、彼女は弾

んだ声で礼を言った。

「本当ですか？　ありがとうございます。ご迷惑おかけします」

「いいって。金目のせいじゃないよ」

頭を下げるまどかにミケシユは苦笑した。

「で、カネラ・イルマ否、シヨコラ？」

言い直してまたぶつとミケシユは吹き出した。

「犬ライフ、充実してます？」

オレは無視して彼女のデスクの脇で伸びた。まどかが出て行った後、珍しく他の同僚が全て出払っているこの管理室で、ミケシユは莫大な数の”仕事メール”に目を通していた。

「私も仕事がありますんで、午前中は寝てください。午後には時間が取れると思いますから。長官がいれば遊んでもらえたんですけどね、今日は一日出てますので」

『そりゃーよかった』

オレは伸ばした足の上に顎を乗せて、目を閉じた。犬になるとよく眠れるのも事実だ。

オレの頭の上で弧を描き、落ちてくるところを飛躍して、キャッチする。くわえたボールをミケシユに持って行く。秋晴れのうっすらと頼りない水色の空の下をオレは軽やかに舞う。

オレとミケシユは東棟の脇の空地に来ていた。

「まあ、今日はそんなに立て込んでなかったんで、こうして遊んで差し上げますが……というか、最近トレーニング不足ですよ、カネラは」

『誰だよ！ 新築急がせてるのは！ 誰だよ！ 経費削減、人員整理してるのは！ 何人分の仕事を一人でしなきゃいけないと思ってるんだ！』

ボールを片手にミケシユは目を細め、じつとオレを見た。

「なんだか私を非難するような、そんな心の叫びが聞こえて来た気がしたんですけど……まさか、ですよね」

ぶんつ、とまたミケシユはボールを投げた。それはいばらの茂みに姿を消した。オレは果敢にその中へ突っ込み、ボールを探し出す。「ていうか、こんな地味な遊びでよろこんでいただけるとは。本当に犬みたいですね、カネラ」

女のくせに口の端だけ持ち上げて笑うと、オレが足下に落としたボールを取り、また投げる。

『おい、さつきから茂みの中ばかり投げ込んでねーか？』

それでも条件反射というか、嬉々としてボールをくわえ、戻るか  
し。

「そうそう、カネラ」

『ミケシユよ？ 称号で呼んでる割には、オレに対するリスクペクトの響きが微塵も聞こえないとはどういうことだ？』

「カネラと私は上司と部下という関係と言えど、その垣根がまるで無いみたいに私を可愛がってくださってるじゃないですか」

『いや、おまえが垣根をぶち壊して踏み込んで来てるだけだか？』

「だから、教えて差し上げますね。内緒にしておこうと思ったんですけど……」

うりゃ！ とまた彼女はボールを投げた。

『なんだ?!』

ミケシユの言葉に気を取られてスタートが遅れた。再度茂みに突進。枯れ葉を全身にまぶして、ミケシユの足下に座る。

「リキ、っていう名前を付けたの、金目らしいですよ。むかし、獅子王から聞いたんですけどね」

『おお、獅子王。懐かしいな……………つて、ええ?!』

「その当時は、金目もキマイラに名前を付ける事がプロポーズの意味があるんだっていう掟を知らずにすっかりつけたらしいんですけど」

そういえば……………リキという名があるのにつがいでないのは今思うと不思議だな。……………だからか。あいつとまどかは以前接触があったのか。

今やっと、リキが目元を染めた理由が分かった。シャムの口から出たまどかの名前に反応したのか。と、言う事は。

「まあ、だからいろいろ気をつけた方がいいですよ」

『いろいろ、つて何だ？ おまえ、その含みのある言い方、なんかまだ隠してるだろう』

彼女は指先でボールをつまんで今度は軽く投げた。

「まあ、でも犬だから便利、つてことあるかもしれないね。普段

カネラに見せない、つまり無防備な部分を金目は油断して見せることもあり得るでしょう。浮気現場押さえちゃったりして〜」

あはは〜

と、彼女は白い歯を見せて笑った。

なにが、あはは、だ。あり得ない。まずオレのテリトリーに入ってくる大バカ野郎にしろ、命を落としたイヤツはこのバーシスにはいないはずだ……たぶん。

「あ〜、こんなところにいたんですね。探しましたよ」

まどかが制服のままやって来た。オレは彼女の姿を認めると、一目散に駆けて行き、タイトスカートから伸びる足下にまとわりついた。

『やだよー、もうこんなオネイちゃんにしごかれるの、やだよー』

オレは救いの神とも言える彼女の手をペロペロ舐めた。

「よかったね〜、シヨコラ。ミケシユさんと遊んでもらったの。体中に葉っぱが付いてるじゃない。ありがとございました。ミケシユさん」

まどかは膝をついて興奮気味のオレをなだめるように首から、頭からワシワシと撫でていたが、頭を上げオレの遊び相手だった管理部長に声を張った。

「いいよ〜。私も徐々に犬と遊んで癒されたし。ずいぶん懐いてくれたし」

『うそつけー!』

「帰ろうか。いっぱい遊んでおなか空いたでしょ。私も今日はたくさん働きました」

それはよかった。出来のいい部下を持ってオレも鼻が高い。って、

今は”長い”だけど。

真っ直ぐに家に帰り、早速まどかは夕食の支度を始める。

「ほんつと、適当でいいから楽だわ〜」

『それ、二回目だよな？ オレ、もしかして重荷？』

オレはシンクの前に立って手を動かす彼女の横に構え、飽きる事無くその上機嫌な横顔を見ていた。

「ご飯食べたら、今夜はのんびりしようね。たまっている検死官シリーズも見たいし。ルイと見るとね、職業柄すぐに種明かししたがるの。最後のオチまで言いたがるからゆっくり集中して見てられないのよ。だから彼がいる時はあまり見ないんだ」

『え！ ウザイってことかよ?!』

彼女は冷凍庫からポタージュを出して解凍する。

「それにねー、あの人、週末はすぐにベッドに引きずり込むからなかなか本を読む時間もとれないの。平日の夜だってほとんど静かに眠らせてくれないのに、週末だともう大変。彼、34なのにまだまだ元気で困るのよね。あ、そうそう、知ってる？”オールドパー”っていうお酒があってね、その名前は実在した人からつけられたんだけど、その”オールドパー”さんは、100歳のときに強姦罪で捕まってるのよ〜。すごくない？ 100歳よ？ 結局男の人って、幾つになってもそっちは衰える事がないのね。種の繁殖能力がそうさせるのかしら」

『おいおいおい！ 100歳のジジイと34のオレを比べるなよ！』

大体34なんてまだやんちゃ盛りだろ！ 真っ盛りだろ！」

まどかも喜んでいいると思ったのだが。オレばかり空回り?! なんか、犬になってからまどかの口から出るオレの話、いいとこないな。もー、食欲ないかも。

頂垂れてすすごキッチンを出かけたところで、まどかに呼び戻される。

「シヨコラ? どこ行くの? トイレ? ごはんもう出来たよ」

くるりと回れ右をして、いそいそと彼女の足下に用意されたボウルに鼻を突っ込んだ。急に食欲が戻って来た。ああ、本能って時に空しい。

焼き魚と米の混ぜご飯。別の皿には薄めたブロッコリーのポタージュ。ごちそうさまでした。

口の周りを舐めながら、まどかと一緒に居間のソファでまったり。彼女の膝枕、柔らかくていい匂いがして最高。まどかは時々思い出したようにオレの頭から背中へ手を滑らせる。

オレ、もう一生犬でもいいかも。

「ふあ〜。全話制覇した〜。すごい達成感!! もうずいぶん遅くなったね。あ、そう言えばルイから今日は連絡が無かった。すっかり忘れてたけど」

『……………』

「まあ、忙しいのかな。さて、明日は何しよう、シヨコラ。ピクニックに行くこうか。シヨコラー、寝ちゃったの?」

オレはきゅつと目をつむり、耳を伏せて自閉中。

『オレ、そんな存在だったの。忘れてたって、その仕打ち、なに?』

「疲れたんだね。しょうがない、ここで寝かせてあげよう。おやすみ」

狸寝入りを決め込んだオレの額にまどかはふにやっ唇を押し付けた。その感触がものすごく昔の事のように、懐かしく思えた。なんかオレ泣きそう。やっぱり、犬嫌だ。

「あれ？ こっちで寝るの？ おいで」

パジャマに着替えた彼女は丁度ベッドに入るところだった。ベッドの脇のパネルだけぼんやり光を放っていた。オレはまさに負け犬の体で彼女の足下に座る。オレはじつとまどかの顔を見つめた。

「どうしたの？」

『頼むから気がついてくれよ……オレ、おまえのルイなんだけど……』

じつとオレの瞳を見つめていたまどかは、明るい声を上げた。

「あ、わかった」

オレは大きな期待にピンと耳を立てた。

『分かった？！ オレだって気がついた？！』

「お家が恋しいんですよ。もう帰りたくなっちゃった？」

……いえ、オレもう自分の家にいるから。

フウン……

思わず情けない声が鼻から抜けた。それが自分への答えだと勘違いしたのか、まどかはぼんぼんとベッドをたたいた。

「おいで。ベッドを毛だらけにしたらルイがいやがると思うからー

緒には寝ないけど、ちょっと抱っこしてあげる」

オレはベッドに飛び上がり、彼女の投げ出した脚の、無防備に開いたその間にちょこんと座った。あ、こうすると目線が一緒だな。いつも上から目線だから、まともに視線が絡むと照れるな。

まどかは両手でオレの顔を挟み、目の下の膨らんだ頬を親指の腹で何度も撫でた。そして腕を首に回した。ぎゅっと抱きしめられる。彼女は片手でゆっくりオレの背中をさする。彼女の体のぬくもりが体中に伝わり、胸の奥にもそれはじんわりと届いた。オレは顎を彼女の肩に預け、うつとりと目を閉じた。ゆるゆると体の力が抜けて行く。

全てを受け入れられ、包まれ、守られている。守られているが、それは同時に心を強くする。揺るぎない安堵。オレの居場所。

抱かれるって、なんて安心するんだ。

「君のご主人様もきつと、シヨコラに会えなくて寂しい思いをしていると思うよ。いつも隣にいた存在が突然いなくなっちゃったら、やっぱり、つらいもん。ましてやそれが自分に取って一番大切な存在なら、ね……」

まどかの声が湿っているように聞こえ、顔を引いて正面から彼女を見る。瞳の淵に涙が溜まっている。

「ご、ごめんね……。なんだか急にルイが恋しくなっちゃった。連絡くれないって、忘れられたかなって思っちゃうよねえ」

ぐず、と鼻をすするまどかが愛おしくて、オレは思わず目尻を舐めた。泣くなよ。オレが泣かせてるって自惚れるよ？

「ふふ、慰めてくれるの？」

まどかは困ったような泣き笑いを浮かべた。

やばいよねえ、それ。

そう思った刹那、体が先に動く。オレはその淡い色の唇に舌を這わせていた。貪るようにそのぷるんとした肉感を味わう。オレはそ

のまま前足で彼女の肩に伸しかかった。

「ん……あつ」

不意を突かれてまどかは後ろに倒れた。

「やつ、シヨコラ！」

彼女はオレを押しつけようとしながら、顔を背けるが、オレはしつこく彼女の口元を追いかける。開いた唇の隙間を縫って彼女の舌を絡めとる。犬の舌なら、普段よりもずっと深いところまで彼女のを絡め取ることができる。歯茎をなぞる。甘噛みをする。

『うまい』

オレはその唾液の味と、ぬらりとした感触、柔らかく歯が沈む感触に腰が痺れるのを感じた。

「んうう！　こら！！」

彼女はぐい、と思い切りオレを押しやった。悔しいかな、中型犬の力なんてたかが知れている。オレは彼女の抵抗の前に、体を引くとまた足の間に大人しく収まった。

「もう……シヨコラ、いきなりどうしちゃったの？」

頬をが濃く染まっている、はあはあと荒く呼吸をしているまどかの顔を見たら、何かが、外れた。オレは彼女のパジャマの中に頭から潜り込むと、下着をつけていないその白い柔らかな胸にむしゃぶりついた。舌を伸ばし、全体で肉が揺れる程に舐め回す。

「きゃあ！」

突然の犬の反撃に、始めはビククリして声も出なかったまどかだが、オレが乳首をぺろんと舐め、少し歯をたてると悲鳴に近い声を上げた。

『ていうか、すでに先っぱ、固くなってるんだけど』

まどかはオレをパジャマの上から追いやろうと必死だったが、その手の下をかいくぐりながらオレは右へ左へ盛んに乳房を舐めて揺

らし、鼻先で、固くなった乳頭を押し込んだ。まどかのガードがいつの間にか緩んだのをいいことに、調子に乗ってしばらく彼女の二つのふくらみを自分の唾液でべたべたに濡らしていると、いきなり鈍い痛みが頭骨全体に響いた。

「キヤウウウウウン!!!」

『いってえええええ!!!』

『今の、ゲンコ！ GENKO！ 拳！ ファウスト!!!』

まどかの怒りをその鉄拳で知らされたオレは、素早くパジャマの中から飛び出すと尻尾を後ろ足の間に挟んで、まどかの顔色を伺った。

「シヨコラ!!! 伏せつ!!!」

怒り爆発のまどかは、オレに指を突きつけた。

『ごめんなさいごめんなさい!!!』

オレは耳を思い切り寝かせ、彼女の足下にひれ伏した。ベッドに体が半分沈む程、ひれ伏した。

「もー、信じられない！ エロ犬!!! これじゃあまるでルイじゃないっ!!! せっかくシャワー浴びたのにでろでろ！ もう一度浴びてこなきや。シヨコラはちゃんと床で寝てなさい！」

『だ、だから、オレ、ルイだし!!!』

きゅん、と鳴いても（泣いても）オレの彼女は聞く耳持たず、バスルームへ消えた。

### 第三話 コンプレックス

翌朝。

オレは、今日一日は自分の気配を出来るだけ消しておこうと心に決めた。昨夜の事でどうせまどかには無視されるだろう。それなら自主的に、と思ったのだ。

が、そんなオレの思いに反し、まどかの機嫌は意外といいようでいつものようにオレと朝食をとった後、キッチンでのごとごとと活動的に動いていた。それでもオレはオレなりに自粛モード。ベッド脇の自分の場所で丸くなっていた。

しばらくして、まどかはバスケットを片手にキッチンから出てくるとスニーカーに履き替えた。

「さ、シヨコラ。いつまで寝てるの？ こんなに天気の良い日に外に出ないなんて罰が当たるわ。それに明日は雨なんだって。ピクニックに連れて行ってあげる」

まどかがそんな企画を。ピクニックなんていつ振りだ？ オレには連れて行けとは言わないが、もしかして、アウトドア好きなのか？ 自分がまどかの事をどれだけ知っているのか。その自分への問いに、愕然となる。それでもまどかはオレのそんな気持ちを知る由もなく尻をぼんぼんと軽く叩き、オレを外へ促した。

「はい、乗った乗った〜」

家の前の道に、卵形の小型車がオレたちを待っていた。

『ええ?! ドライブ? まどか、おまえ運転するの?! いや、バーシスの研修プログラムでは、走るヤツ、飛ぶヤツ、潜るヤツ全般、訓練させて動かせるようにはするけどさ……』

「ふふ、今日、何となくひらめいたの。いつもルイの隣に座ってるから、今日は私が運転してみようかなって。バーシスのレンタルに

頼んじやった。小さいのが空いててよかった」

「さー、出発進行〜」

間の抜けた声で、それでも緊張しているのか前を食い入るように見つめ、スタートさせた。車体は宙に浮き、滑らかに前進した。街の外に出るライン34に乗ってしばらく走ると、角張っている建物ばかりの縦長の視界は、突然ワイドでのどかな田園風景に変わる。秋の大地は水分の抜けた白っぽい草で覆われている。目の先には黒々とした緑色の針葉樹が繁茂している。

まどかと始めてデートした日のことが蘇って来た。

まさか、まどかはアフィスの丘へ行くつもりなのか。

その、まさかは的中した。一時間も走り、林の一本道を抜けると広々とした空地が広がる。向こうに見えるロッジも以前と同じ位置に、同じ形で健在している。もっさりとした羊たちも草を食んでいる。

オレたちは車から降り、まどかはバスケットを手になだらかな丘の傾斜をゆっくりと下った。オレの足の下で青草が乾いた音を立てた。

一本の大きな木の下まで来ると、彼女は持参した古い毛布を広げる。この木の下、この場所。

季節こそ違えど、ここはまさしく……

オレは鼻を持ち上げ、秋の匂いを胸いっぱい吸い込んだ。枯れ葉、木の実、野生の獣の匂いと、湿った土の匂い……

「ここはね、私がルイと始めてデートした場所なんだ。まさにこの場所。ここがオリジナルです」

彼女もオレと同じように、立ったまま軽く頭を反らした。風が彼女の髪の間をすり抜けるたびに、毛先が顔の輪郭をくすぐっていた。彼女は夢から覚めたようにすっきりとした笑顔をオレに向け、言った。

「さあ、シヨコラ。いっぱい遊んでうんとおなかを空かせよう。ほ

ら、君にボールを持って来てあげたわよ。好きでしょ？」

『う、まあな』

まどかはパーカーのポケットからテニスボールを取り出すと、腕を大きく振りかぶった。

小川に反射する光でボールを見失わないよう、オレは一目散に後を追った。そんなオレの後ろを彼女はのんびりと付いて来る。

「お水よ。いっぱい飲みなさい」

まどかはバスケットから小振りのボウルを取り出し、なみなみと注いだ。永遠に続くかと思える広大な大地をさんざん駆け回った爽快感に喉の渇きも忘れていたが、冷たい水を舌ですくうと、すぐにそのボウルを空にしそうな勢いで水を飲んだ。まどかも喉を鳴らし、ボトルを傾けている。喉が潤うと、彼女はオレに厚切りのロールストビーフのサンドイッチを差し出した。行儀良くそれを受け取り、飲み込むようにして食べた。まどかは自分のターキーサンドにかぶりつきながら、オレにもう一つサンドイッチをよこした。

「ねえ、君のご主人様は君に”好きだ”っていつも言ってくれる？」  
食事が済むと彼女はごろりと仰向けに寝転がった。オレは彼女の横にぴたりと寄り添って体を伸ばしていた。

『うー、あー、アレの最中は、まどかはオレに何度も言っている気がするが……』

オレは首を傾げた。

「シヨコラみたいに可愛かったら、言うよね。……あのね、ルイって、愛してるとか好きとかって言葉にしないんだ。そりゃ、態度でわからなくもないよ。愛されてると思う。でも、やっぱり言葉が欲しい……って思うのはものすごく贅沢なのかなあ。確かにルイ

は私に言うのね。私の存在が”かけがえの無いもの”だって。でもそれって、何？ 冷蔵庫とか書きやすいペンもその言葉に当てはまると思わない？ 書きやすくて手に馴染んだペン、無くしたら私辛いなあ……だから、ね、私は単なる彼の”生活の一部”なんじゃないかって思ったの。私が残ったってことは、もうここにずっとというって事よ。帰るところが無い。だから彼は、私が彼の元から逃げ出す事はない、彼が手放さなければずっと彼の側にいると括っているんじゃないかしら。ほとんどの事はルイの方が手際良く出来る。頭の回転もルイの方が早だし、力だって強い。仕事もできる。生活も潤っている。それに比べたら、私はここでは異邦人で、ちょっとした変わり種だわ。つまり彼は自分の、ほぼパーフェクトな単調生活に少し変わった刺激が欲しかったんじゃないかしら。そのポジションに適していたのが、私だった。ペットよりは手が掛からない……だから側に置いている。そんな気がするの”

彼女は惚けたような表情で、ただ空を眺めていた。オレは彼女の話最後まで聞いていたが、それを理解することを拒否したがっている自分がいた。彼女の言葉のままに理解することは、自分が谷底へ突き落とされるのと同じだった。

おまえ……オレの中のおまへの存在をそんな風に思っていたのか？！

「私がいくら”この人だ”って思っても、相手も同じ気持ちかどうかなんてわからない。もし、そう思っていたとしても、それがいつまでも続くなんて保証はどこにも無い。いろいろな事がちよつとずつ影響して、はじめに見ていたものが形を変えて行くかもしれない。それは日々少しずつ変化するもので、普段は気がつかないんだけど、ふつとある日もう一度良く見れば、すごく変わっている事に気がついて愕然とするんだわ。昔はこんな風に考える事なんてなかったんだけど。相手の事を本当に好きになると不安が、どうしても不安の

方が大きくなるね。……大事なものを失うのは、やっぱり怖いもの。一度経験したら免疫が出来るってものじゃないわ。失うことはいつでも悲しい。……それが、わたしの”とっておき”ならなおさら」

まどかはいったん言葉を区切ると、オレの頭を二度三度撫でた。

オレは彼女の胸の上に顎を預けた。

「ここで始めてデートしたときに思ったの。『私には、この人しかない』って。あのとき、ルイが私をどう思っていたのかは分からないけれど、私はもう自分の気持ちをはっきりしていた。好きだと言う事を確信していたの。すごく勇気が出たわ。一人の人を好きだと思った瞬間、自分がすごく強くなった気がした。鳳乱を失った後に、そんな気持ちになれた事は自分でも驚きだった。体の奥からふつふつと暖かいものが湧き出る感じ。久々だった。この人さえいれば、他には無いもいらぬ、とさえ思えるのよ。でも、実際に気持ちを受け入れられると、疑いだす自分がある。『本当に自分は愛されてるのか』どうして好きな人を疑ってしまうのか分からないのだけど。……ごめん、なんか訳の分からない事ばかり話して。シヨコラに話しても困るよね、答えのでない話なんか……きつとこの場所に来たからいろいろな事がいっぺんに溢れて来ちゃったんだわ」

長い話が終わるとまどかは体ごとオレの方へ向け、手を伸ばして首にかじりつき、顔を毛の中に埋めた。

オレはこのときほど、自分が犬である事を恨んだ瞬間はない。

どうしてオレは今、しっかりと自分の両腕でまどかを強く抱きしめてやる事が出来ないのか。

どうしてオレは今、彼女に「愛している」と一言囁いてやる事が出来ないのか。

どうしてオレは今、「そんな思いをさせてすまなかつた」と、優しく唇を吸うことが出来ないのか。

まどかはしばらくして顔を上げると、柔らかい笑みを浮かべた。

「ウチに帰ろうか。少し風が冷えて来たね」

まどかは手際良く全て片付け、パーカーのファスナーを上まであげた。

帰りの車の中で彼女は独り言のようにつぶやいた。

「だから、自分なりに追いつこうと努力はしてるんだけどねー。でもスタートラインから違うんだから背中が遠い遠い……」

それから家に着くまでずっと黙ったままだった。

オレは彼女のこんなに強い、でも哀しくもある横顔を始めて見た。

それでも一つだけ言える事がある。オレが思っている事はまどかも思っているんだ。不安で、信じたくても疑ってしまう。確かだとわかっていても、でもどこまでもあやふやな関係で、それはお互い様ってこと。………ある意味、相思相愛だな。

一面ガラス張りで最上階のオレの家は、雨が降るとまるで滝の中にいるようだ。頭から雨に打たれている錯覚に陥る。

「ふーん。今日は家から出れないね。片付けでもして、本を読もうか」

まどかはパンケーキをフライパンから直接オレの皿の上に乗せた。  
「まだ熱いよ」

オレは皿の前に座り、パンケーキから立つ湯気の向こうのまどかを眺める。

昨日の話していた事などすっかり忘れたかのように、いつも通り明るく、やさしいまどかだ。

オレは今までその姿に騙されていたのか？ 本当に、オレは一体何を見ていたんだ？ 彼女の言う通り、彼女がオレの前から姿を消すなどありえないと、思い上がっていたか。

びびびび……

テーブルの上のパルスが鳴る。

「ルイかなー」

声に艶があるのを聞いた。

『悪い、でもオレじゃないんだ』

彼女は少し眉を寄せて手の中のパルスを見ている。

「んん？ 誰だろ、この番号……はい？ あれー、リキ？」

ん……………ぐうう！！！！

オレはパンケーキを喉につかえかけた。

『?! なんだ?! リキって、なんでリキなんだ?! いきなり  
浮気発覚?!』

「なんで番号分かったの？ そうかー、ミケシユさんに……………で、幾  
ら払ったの、って冗談よ………うそ………ほんとに払ったの？ ……  
……………」

『ミケシユの呪い!! 否、フラグ!!!! この事だったのか?!  
金のためなら上司の女まで売るのが……!!』

オレは、シンクに寄りかかるまどかの足下を落ち着き無くうろつ  
ろする。

「うん、いいよ。ユランには映画館ないもんね。雨だし、どうしよ  
うかなって思ってたところ。え？ うれしい。ウチはねえ……………」

『何が嬉しいんだよっ!! っ、あいつ迎えにくるつもりだな！

！ 住所教えるなよっ！ オレのテリトリー進入禁止！！ 出入り禁止！！ オレ、今すぐマーキングしてくるからな！！』

「わんっ！ わんわんわんっ！！！」

オレは二人の会話を邪魔すべく本気で吠えだした。ジャンプしてまどかに体当たりをする。

「ちょ！ シヨコラ、邪魔しないで。今友達と話してるんだから……ごめん、犬がね、遊びたいみたいで……」

まどかはオレの攻撃をかわしつつ、キッチンから逃げる。もちろん、オレはその後を追う。

「うん、じゃああとで……」

彼女はあわてて話をまとめると、オレの前に仁王立ちになった。美しい眉は非常なまでにつり上がっている。

「シヨコラ、伏せ」

静かな、その落ち着いたトーンが反って怖いんだけど。オレはしぶしぶ床に這いつくばる。

「あのね、外に出られなく退屈しているのはわかる。でも、人が他の人と話しているときには、静かにしているものよ？ わかった？」

『……でも、そいつはオレが今犬だって知ってて、それで、名前を付けたおまえをどうにかしよう……』

まどかはオレの頭を優しい手つきで撫でた。

「今からちよつと出かけるから、留守番お願いね。雨が降ってるから、今日は外に出たらだめだよ」

オレはすごすごと毛布の上へ行き、丸くなった。

「なにか、美味しいもの買って来てあげるから」

まどかはオレに近づき、鼻先を撫でた。

それから彼女は、派手ではないが十分デートだと分かるコーディネート

ナイトに、ずいぶん時間をかけて化粧をした。の、割にはずいぶんあっさりしているが。そして、パルスがヤツの到着を告げると家を出ていった。

……なあ、オレが犬じゃなくって、普通にルイでもそいつと出掛けるのか？ それとも、こそこそオレの知らないところで会うのか？ そんな風に考えるのは、心が狭いってことか？ おまえを誰にも渡したくないって思うのはいけない事なのか？

こんな姿でオレが今彼女に何が出来るっていうんだよ！ 仕事上の過失とはいえ、自分で自分を呪った。なんでオレがこんな目に遭わなきゃいけないんだよ。オレが何をしたらって言うんだ。罰ゲームにしてはヒドすぎやしないか……

ぐるぐると答えのない消化不良な思考。そんなオレの脳裏にハッと昨日のまどかの表情が浮かんだ。

シヨコラにだけ、見せた顔。シヨコラだから打ち明けた胸の内……  
オレはこの姿になった運命に感謝するべきじゃないのか？ もう一度彼女のために何が出来るか考えろ、っていう啓示じゃないのか？ オレは……

オレは跳ね起き、家を飛び出していた。

灰色の重たい雲が広がり冷たい雨を降り注ぐ。オレは中心街の方へ走り出した。匂いはもちろん水で流されているが、映画を見に行くならあそこだろう。皮膚に水の流れるのを感じ、毛がぺたりと体中に張り付く。毛先からしずくが滴る。それでもオレは走り続け、シヨッピングセンターの裏の映画館の前に立った。ガラスごしに口ビーの中が見えた。中にはそこそこ人がいて、オレは端から、反対側の端までまどかの顔を探したが、しかし既に鑑賞中なのかその姿を見つける事が出来なかった。屋根の下で雨をやり過ぎそうと思っ

だが、外からロビーが見えるところには屋根が無く、オレはいつ出てくるか分からないまどかを仕方なく雨に濡れながら待った。

なんか、オレ今すごく惨めじゃない？ 他の男とデートしている彼女を追いかけて来て。冷たい雨に打たれて。こんなこととして、誰の得になる？ でも……それでも……オレは、彼女の側にいたい。それだけしか考えられなかった。

水門が開いて水が流れ出るように、人がロビーに溢れ出した。オレは目を凝らしてまどかの姿を探す。彼女の方が先にオレを見つけた。まどかはガラス越しに、「信じられない」と言うように目を見開き、飛び出して来た。

「シヨコラ！ ずぶ濡れじゃない！ どうしたの？ お家で待ってって言ったのに……」

まどかの頬も雨の雫に濡れた。

ずっと視界に影が差す。傘がまどかの上で浮いていた。リキが近づいて来て、それを宙に広げたのだ。人がオレたちの横をすぎて行く。それでも見向きもしない。たかが犬とその飼い主に誰が興味を持つだろう。

「……シヨコラ、っていうの？」

「うん……付いて来ちゃったみたい。すごく寂しがりやなんだと思う」

リキはポケットに手を突っ込んだままオレをじつと見下ろしている。

「寂しがりや……ね。実はすごく嫉妬深いんじゃない？」

まどかはきよとんととしてリキを見た。

「犬が？ まさか」

「いや、動物だってそういう感情あるよ。僕だってキマイラだけど、まどかのこと好きだもん」

『オマエ、オレが誰だか承知して言ってるんだろつな。ああ、知ってるはずだよな。じゃあ、オレに殺される覚悟は出来てるってことだな』

全身の血が煮えたぎり、体から湯気が立つ勢いだ。オレは牙をむき出し、ウウウウと低く唸った。

そんなオレの怒りを微塵も感じていないのだろう。まどかは朗らかに笑った。

「あはは、やだ。リキったら。あ、こら、シヨコラ。牙を剥かない」

「ほら。僕に敵意を持つてるでしょ」

リキは冷ややかに笑った。

「あー、今日はこれでデートはお開きだね。送って行くよ、シヨコラも一緒に。早くしないと風邪を引くよ」

「ごめんね。シートには上げないから」

まどかはリキの隣に並んで歩き始めた。リキはこれ見よがしにその彼女の肩を抱いた。

脚に噛み付いてやるうかとも思ったが、それはまどかに迷惑をかけるだけだと思い、ぐっと我慢した。

『今だけは夢を見させてやる。でもな、金輪際オマエがまどかに触れるチャンスは皆無と思えよ』

オレは二人の背中を見ながらその後を大人しく付いて行った。

それでもオレの方の夢は早く覚めて欲しいものだ……………

まどかはすらりと脚を揃えて既に車の外に出していた。降りる間にリキに本当に済まなさそうに声をかけた。

「ごめんね。今度連絡する」

「出来たら、でいいよ」

オレを流し目で見るヤツの横顔に苦笑が浮かぶ。あ、それから…

…リキは顔をまどかに近づけた。

「まどかは、かなり大事にされてると思うよ。それも病的にね」

「え？」

その問いに答えず、リキは体をひねってオレにだけ、犬のオレにだけ聞こえる声で囁いた。

「あなたが邪魔しなければ、これから僕の部屋へ連れ込んでふたりで楽しもうと思ったんですけどね」

そして後部のドアを開けて普通の声色で言った。

「さあ、早く降りてください。後ろびちよっり濡れちゃったじゃないですか」

「そうよ、早く来なさい、シヨコラ」

既にドアの横に立っていたまどかに呼ばれなければ、オレは目の前にあるリキのかたちのいい鼻を食いちぎっていたに違いない。

オレは車から飛び降りた。

エレベーターの前で体を振って水を飛ばし、家の中に入る。

「シヨコラ、お風呂に入れてあげる。暖まらないと風邪を引いちゃうんじゃないのかな」

オレはピンと耳を立て、その言葉が嘘でないかを確かめるべくまどかの顔を見上げた。

彼女は「おいで」と、先にバスルームに入ってしまった。

『ウソ！！ これって、もしかして”仲良くお風呂でキャツキャ”』

『ってヤツ?! なんだ！ 犬ってそんなに悪いもんじゃないな!!』

オレは尻尾をぱたぱた揺らしながらバスルームに行き、そこに立つまどかの姿を見ると尻尾の動きは止まった。

『なんだよ、キャミソールとショーツ着けてるってことは、オレだけが洗われるってオチかい』

「はやくー」

まどかはシャワーを持ち、そこからは湯気を立てて熱い湯が流れていた。オレはしぶしぶ彼女の横に立つ。彼女は尻の方からゆつくり湯をかける。冷えていた体がだんだんと暖まっていくのは気持ちよかった。シャンプーで体を泡だらけにされ、擦られる。オレは体を振って泡をはね飛ばした。シャンプーの匂いがキツすぎるぞ。「ちよつと、シヨコラ？ 私も濡れちゃうからそれは全部終わってからにして」

オレの横にしゃがんで、彼女は不服を唱えながらも笑いながら泡を流し始めた。オレはまどかが笑ったのが嬉しくて、再び体を振った。

「シヨーカー」

眉を寄せてはいたが、声に怒りは含まれていなかった。たつぷりと湯をかけてシャンプーが残らないように丁寧に流している。

『！！！ ウワ！！！ ちよつ……』

首を少しひねってまどかを見ると、ほとんど濡れてしまった彼女のキャミソールが体の線に沿ってびたりと張り付いていた。かたちのいい胸のふつくらとしたラインが浮き彫りになり、その中心は少し色を濃くしてピンと尖っていた。髪は上げていたが、後れ毛が細い束になって白い首筋に流れていた。

『これ、ヤバくない？！ なんかすっごくイヤラシいんだけど！！  
って、視姦ていうの？ コレ？！ いい！ 今度はコレでいこう  
！ 下着着けたままお背中流し大会！！』

オレは再び彼女に襲いかかりたい衝動にかられたが、まどかの鉄拳を思い出し、散りかけた理性をなんとかかき集めてドライヤーの

風に吹かれるまでに至った。

「ねえ？ ちよつとのぼせちゃった？ ぼーっとしているみたいだけど大丈夫かな」

『だいじょうぶ、だいじょうぶです！！』

オレはハツハツと舌を出し、尻尾を振った。

そうは言ったものの、風呂から上がってしばらくすると体は鉛のように重くなり、オレはダウンしてしまった。水は飲んだものの、まどかが鼻先まで持つて来てくれた鶏五目ご飯にも食欲はまったく湧かなかった。体は火がついたように火照っていた。それでいて、寒かった。かちかちと歯を鳴らすオレを心配そうに覗き込みながら、まどかは何度もオレの体を撫でた。

「大丈夫？ 大丈夫じゃないね……どうしよう。やっぱり風邪ひいちやったんだ……寒いのか？」

彼女はオレを抱えると、ベッドに横たえた。ご丁寧に毛布まで体に掛けてくれた。

「こんなときに、ルイがいたら……ルイならすぐに治してくれるのに。ルイはね、見かけは冷たいようだけど、ほんとはすごく優しいの。誰に対しても……あ、そうだ長官に連絡してみようか」

まどかはパルスを手にも、オレの側に戻ってくるとしばらくその機械に耳を当てていた。

「……だめだ。つながらない。何かあったらすぐに連絡しろって言ったのに……」

彼女はパルスをベッドの上に放り投げた。そしてまたオレの体を毛布の上から撫でた。

おまえは知らないだろうが、シヤム、奥方から”週末はパルス禁止令”発布されてるんだよ。週末は完全ファミリースービスだって

さ。パルスを手にしただけで、殺される勢いだからな。っていうか、バーシスの最高司令長官たるものが、週末連絡とれないなんて終わってるだろ。まー、非常事態なら奥方の方に連絡を入れるってお約束だけどな。そーいうわけで、シヤムは捕まらない。

オレは朦朧とする頭の中で、誰に言うわけでも無いがそんなことを考えていた。

呼吸が浅い。これがただの風邪ならいいのだが。まさか今になってあの奇妙なガスの副作用なんてことはあるまい。いや、でも万が一ってこともある。じゃあ、なんだ、オレどうなるんだ？ 死ぬのか？ この犬の姿のまま死ぬのか？ まあ、最期にまどかに看取られるだけかもしれませんが……

まどかが口の端から時折水をスプーンで流し込んでくれた。

「ねえ、なんでルイはこんな大事なときにいないのよ………なんで連絡もよこさないの？ 私が何をしているか気にならないの？ 私の声を聞かなくても平気なの？ 私は平気じゃない。ルイの声が聞きたい。ルイが何をしているのか知りたい……シヨコラ……元気出してよ。ねえ、私どうしたらいい？」

側にいてくれるだけでいいよ。

そう言いたかった。そう言えるならば……今さら後悔しても遅いな。うん。オレ、少し日頃の行いが悪かったのかもかもしれない……自分の彼女が寂しい思いをしてたなんて露とも思わずにな。うん、自業自得ってヤツ？

「シヨコラ？ 寝ちゃったの？」

だんだんと意識が薄れて来た。だめだ、オレ、眠くて……今夜もおまえの側で眠らせてくれよ………まどかの香りがすると

いじりで……

そこで意識が途切れた。

## 第四話 You are the one

目を覚ましたときにはだんだんと空が白んで、部屋の全ての輪郭がぼやけて見える時間だった。寒気は治まったものの、体はまだ熱かった。目の前にまどかの顔があった。規則正しく寝息を立てている。それだけで安らいだ。喉が渴いていたが、どうでもよかった。オレは再び眠りに落ちた。

ベッドのきしむ音で目が覚める。

「あ……起こしちゃった？ 調子どう？」

『だめ……かなり』

それでも安心させたいがために、彼女の手をひと舐めた。

「だめそうだね……鼻が乾いてる。お水持って来てあげるね」

まどかは指先でそっとオレの鼻に触れ、毛布の隙間から抜け出した。十分にオレの喉を潤すと、彼女は着替えもせずにパルスを取った。

「あ……早朝にすみません。あの……シヨコラが倒れちゃって……ええ……」

ああ、シヤムに繋がったんだな。

話は簡単にすんだようだ。まどかは急に忙しく動き出した。シャワーを浴び、朝食もとらずに、ただカップの紅茶を一口飲むと、出勤の支度を手早く整えた。

「シヨコラ、長官と連絡が取れたの。彼もすぐにバーシスに来てくれるって。薬を用意してくれるの。すぐに帰ってくるから待ってるよ。絶対に家からでちゃだめよ。私は必ず帰ってくるから」

「ねえ、その言葉がどれだけオレを安心させるか、おまえわかってる?」

くう……

オレは喉の奥で答えた。

そして彼女は出て行った。

体を揺り起こされる。

「シヨコラ、薬よ。これでよくなるって。ちゃんと元通りになるって。長官が『賭けてもいい』って言ってたわ。元気になったら、ご主人様のところに戻れるって」

あー、またそんなこと言ってるのかあいつは。しかし、なんの薬だよ？ オレは変な薬は飲まない主義なんだ。

まどかが手のひらに水色のカプセルを一つ乗せている。

なんか、素直に飲む気になれねーな！。

薬に全く関心を持たず、飲む気配を見せないオレに業を煮やしたまどかは、オレの口を無理矢理こじ開けようとした。オレはなぜか頑にそれに反抗したくなった。なぜか。それはわからない。元気になるたくない？ ご主人様のところってどこだよ。オレの居場所は、ここ以外に無いんだぜ？

歯を食いしばり、抵抗する。

「もう、薬がいやなのはわかるけど！ ルイも薬嫌いだから。でも、

飲んでよ！」

彼女はオレの上あごと下あごに手をかけたまま、顔をぐっと近づけるといきなりオレの耳の中に強く息を吹きかけた。

！！

驚いた拍子にはかっといとも簡単に口が開き、その隙を逃さずに彼女は喉の奥にカプセルを放り込む。片手で口を閉じ、固定したままコツン、と軽くオレの額を叩いた。オレはビククリしてごくりと薬を飲み込んでしまった。あつという間の出来事だった。無理矢理薬を飲まされたのにも関わらず、あまりの彼女の手際の良さに感心せずにいられなかった。

『さすがバーシスの医療チームにいることだけはある！』

「さ、あとは薬が効いてくるのを待つだけね。長官がね、休みをくれたの。今日あたりルイが帰ってくるかもしれないんだって。だから家にいて、好きなものでも作っておいてあげようかと思って」

オレに水を与えると、嬉々とした雰囲気隠す事も無くまどかはオレの隣にポテツと横になった。彼女の顔は嬉しさで緩みっぱなしだった。

オレが帰ってくるのが、そんなに嬉しいのか？　もしかしてオレはスゲー幸せ者だって勘違いしてもいいのか？　そう言う顔を見せると、オレ、成り上がるぜ？

オレの頭から背中まで滑る彼女の手の感触に酔いながら、再び眠りの沼に引きずり込まれた。

「目を覚ましたら、きつと元気になってるわ」

彼女の声はすでに夢の中で響いた。

水の流れる音。軽快に一定のリズムでぶつかる金属の音。肉を焼く香ばしい匂いに混じって、数種類のハーブの香りが部屋に漂っている。

ああ、まどかがキッチンにいるんだ。そーか、帰ってくるオレのために腕を振るうって言うってたもんな。

熱はすっかり下がっていた。さすがにバーシスの薬は即効性があるようだ。そのうえ、幸運な事に、妙な薬ではなかったらしい。

オレは大分すつきりした頭を持ち上げ、体を起こした。……………上半身だけ起こす。上半身だけ？ まさか？ 目の高さに両手を持っていく。

右 1 2 3 4 5 左 1 2 3 4 5

両手に指、5本ずつ。焦げ茶色の毛も生えていない。視線を下に移して行くと、何も身に付けていないが、程よく鍛えられた筋肉の付いた胸と腹が露になっている。そして、視界がカラーだ！

も、もどった……………

「る……………ルイ?! どうして……………?!」

オレの心臓の音を代弁するようにまどかの声が部屋中に響いた。オレは声のした方へ振り向いた。まどかが、口をぽかんと開けて立ち尽くしていた。

「た、ただいま……………」

オレは出来るだけ陽気に挨拶をしたつもりだったが、声は掠れていた。

「い、いつ帰ったの?! なんで裸なの?!」

「え、あ……………結構汗かいたから、シャワー浴びようと服を脱いだけど、やっぱり疲れたから一休みしてそれから……………」

オレが苦し紛れに、それでも必死でそれらしい弁解をしていると言つのに少しも耳に入らない様子で、弱々しい声を出した。

「……どうして帰って来たら……最初に声をかけてくれないの……？」

唇を噛んで、オレを軽く睨んでいる。そうでもしていないと、何か溢れ出しそうな様子だ。

「ご……ごめん……。なんか、忙しそうだったし……」

適当な言い訳を重ねる。が、いきなり彼女はオレの言葉を遮り声を上げた。

「あ！ 大変！！ ショコラ！ ねえ、犬がそこに寝ていたんだけど、見なかった？！ 茶色い犬」

「あ、ああ……なんか、勝手に外に出て行つたみたいだけど……なに？ あの犬」

さも目撃したかのようにさりげなく言ってみる。

「え……どうしよう……あの子、病気なのに。トイレに行きたかったのかな……見てこようかな……」

親指の先を軽く噛みながら、彼女は落ち着き無くベッドの脇ををウロウロと歩き回る。オレが目の前にいるのに、それも久々に会つた（はずの）オレを尻目に懸けて犬の心配だ。なんだか気持ちいいものではない。オレは素早く手を伸ばして、彼女の手首を取ると胸の中に引き寄せた。

「きゃあ！」

いきなり引つ張られ体のバランスを崩したまどかはすつぽりとオレの胸に収まる。彼女を横抱きにすると、その顔を覗き込んだ。

「なあ、オレが久々に帰って来たのに、犬の心配なんかしてさあ。オレと犬とどっちが大事なの？」

オレは”犬のオレ”に嫉妬していた。

「だって、だって、シヨコラは長官直々に頼まれた犬なのよ。私が少しの間預かるって約束したの。それで昨日から熱が出ちゃって……出て行つたってことは少しは薬が効いたのだと思うんだけど」

でも見てくる、と身を起こしかけた彼女の体に腕を回す。

「行くなよ。大丈夫だって。そんなに懐いてたなら、すぐに戻ってくるだろ。な、もう少しだけ様子を見て、それでも帰ってこなかったらシヤムに連絡をしよう。もしかしたら、本当の主人のところへ帰っているかもしれない。動物の帰巢本能はすごいから。それにそんな大事な犬だったら、チップを埋め込まれているはずだからすぐに追跡出来るよ」

オレはなんとかシヨコラの存在を彼女から上手く遠ざけようと言いたいことを言った。なにしろもう、「シヨコラ」は存在しないからな！

「本当に大丈夫かな……病気なのに」

”追跡可能”という言葉で少しは気持ちに余裕ができたのか、探しに行く事は諦めたようだ。それでも、まだ何か吹っ切れない様子だ。もう一押しか。

「弱ってるからこそ、愛する人のところへ行きたいんだろ。それはまだかだって同じじゃないの？」

さあ、これでどうだ。

彼女の心配に溢れる瞳をしっかりとらえながら、オレは頬を指の腹で優しくなぞった。

「そ、それは……」

彼女は俯き、言い淀むが、すぐに意を決したように顔を上げる。

「……じゃあ、30分だけ待ってみる。それでも戻ってこなかったら長官に連絡して、飼い主にも連絡して……」

オレはその唇を塞いだ。

犬のことなんか忘れさせてやるのに30分で十分だ。

かなりの時間をかけて彼女を舌で舐る。まだかもオレの髪の間の手を差し入れ、控えめな手つきで弄っている。体をオレに押し付ける。

「うん……ん」

彼女の胸を上から包み込むと、微かに呻いた。オレはほんの少し

お互いの体に隙間を作り、聞く。

「オレに会えなくて、寂しかった？」

彼女はオレの目にかかる前髪を指先でそっと払う。

「うん……でも、シヨコラがいたから……すごくいいコなのよ、私に懐いてくれて……」

まだ犬かよ。オレは再び唇をとらえて彼女の言葉を飲み込む。オレの顎の動きに合わせてかけたまどかの腕に、ぐっと力が入る。

「ね……もう、30分経ったんじゃない……？」

ぼーっと、頬を染めてまだそんなことを言う腕の中の恋人。頑固というか、責任感が強いというか……オレは諦めて、白状した。

「シヨコラはもういない。オレが……シヨコラだったんだから」

彼女は一瞬眉をひそめたが、すぐに口元を拳で押さえて吹き出した。

「やだ。そんなこと言って続きをしないでくださいね。私にシヨコラを探させないつもりね？ とにかく長官に連絡しなきゃ」

そう言いながら腕からすり抜けようとする。オレはそんな彼女を引き寄せ、ゆっくりと押し倒す。

「信じるよ。本当なんだって。仕事中にへマをして、ガスを吸ったんだ。それで犬になったんだよ」

まどかは瞳にまだ笑いを浮かべている。

「ルイ、シヨコラは長官のお知り合いの犬なのよ。彼がそう言ったの。どうして長官が私に嘘をつくの？」

「それは……いつものヤツの……ヤツの言葉を借りて言えば”おちやめな悪戯”だ」

「まさか。だって……バーシスの最高指令長官たる人が？」

「ああ、そのまさかのバーシスの最高司令長官たる人が、だ」

少し混乱しているらしい。オレは彼女をベッドに貼付けたまま少しずつ記憶の糸をたぐって語り始めた。

「犬初日、買い物。お前はルイの夕食の支度をしなくていいと大喜び。夕食、チキンのグリル、茹でた芋。二日目。オレをミケシユに

押し付ける……」

「ちよ、ちよっと待って」

少し驚いた顔を見せつつも、一緒に記憶を辿っていたまどかはオレの言葉を遮る。

「私、あなたのパルスからメッセージを受けているわ。それもシヨコラが目の前にいたときに。私、彼に読んであげたもの」

「あのな、シヤムがオレのパルス使ったんだよ。ロックしたところであいつの前にはそんなの意味が無いからな。それにオレのIDコードの覆面被せてどこからでもメッセージくらい送信できるだろ。で、そのメッセージはこうだ。『心配かけてすまない。一刻も早く片付けておまえを抱きたい。愛してる。おまえがいない世界なんて考えられない』、そんな内容じゃなかったか？」

一語一句覚えている自分の記憶力に感心せざるを得ない。というか、恥ずかしいメッセージほど記憶に残るものだ。まどかは何も返せない。目を見開いたままだ。

「なあ、オレがそんな面倒くさいメッセージを送ると思う？」

「お、思わない……」

それには即答だ。悪かったな。さあ、続きだ。

「それから……検死官シリーズ鑑賞、ルイがいないから思う存分見れて満足……その後、鉄拳炸裂……」

彼女はハッと息をのんだ。

「そ、それはいきなりシヨコラが……」

オレもあまりそれには触れたくない。再び言葉を継ぐ。

「アフィスの丘へドライブ。スピードはあまり出さないが、運転はまあ、上手いほうだ。ローストビーフのサンドイッチ。ルイへの不満、疑心……」

彼女の言葉が蘇る。

「ごめん……お前がそんな風に思っているなんて考えた事が無かった」

彼女の背に手を回し、強く抱きしめた。まどかはオレの首に腕を

絡ませた。

「大体、おまえはオレの”生活の一部”なんかじゃない。”オレの一部”だ。おまえはオレの心臓で、腎臓で、血で肉だ。おまえ、自分の心臓や肝臓に毎日毎日”愛してる”だとか”好きだ”とか言うか？ お前はオレの中に無くてはならないものなんだよ。お前がいなかったら、イルマ ルイは、機能しない」

まどかは腕を緩め、明らかかな不満を目に浮かべてオレを見た。

「な、何それ？　なんか、愛の言葉にはほど遠く聞こえるんですけど。それに、臓器移植も出来るよね？　代わりもあるよね？」

まったく、そんなへ理屈はどこで覚えるんだ。

「おまえ、研究者にとってこれほど心打ち震え、心拍数、脈拍が上昇し、発汗して瞳孔の広がりを見せるような愛の告白は無いと思うぞ？」

「そのセンス、なんかずれてると思う」

「まあ、いい。要約するとオレにはおまえしかいないってことだ。お前がどこにも行かないだろうなんて驕おこってないからな。オレがお前をどこにも行かせないんだよ。たとえばお前がリキとこそこそ会っていてもな」

腕の中のまどかが一瞬固まった。

「ずいぶん楽しそうにしていたな。ま、友達に合うのはいつでも楽しいよな」

「う、うん」

「リキって名前付けたの、まどかなんだって？　いい名前だな……ねえ、他にもあいつと何かあった？」

「な、何も無いよ……」

「そう？」

視線を泳がせているところは気がつかない振りをしてやる。

まあ、これくらいにしておいてやるか。大体こういう類いのものは詮索したところで出てくる話に愉快なものがあったためしがない。

豊富な経験上。

それに、今、実際に彼女のシャツのボタンに手をかけてるのはオレだしな。オレは彼女をすっかり剥いてしまふ。やんわりと抵抗する彼女の腕を優しく払い、体を開く。自分を深く沈み込ませる。二人でゆるゆると波間を漂い、吐息の甘さに酔う。精神の弛緩、体の部分的な緊張。何度も繰り返し、やがて大きな波にのまれ、オレは彼女の中に自分を散らせる。オレの下で彼女は、溶けるかと思うほどにその体を火照らせ、喉の奥からオレの名前を何度も絞り出す。それが何の役にも立たないとわかったときには、全身は硬直し、オレの背に爪を立てる。

枕に背を預けるまどか。揃えて伸ばされた毛布に隠れた脚の上にオレは頭を乗せている。彼女は繰り返し、指でオレの髪を梳く。やつぱりいいな、膝枕。シヨコラのとときで味を占めたのか、オレ。

「ねー、オレのコメント、そんなにうるさい？」  
まどかは一瞬何の事かと首を傾げた。

「え？ ……あ、そう言う意味じゃなくて……ああいうのは、自分でストーリーにのめり込んで、自分なりに結末を推理したいじゃない。でもルイが言う事全部当たっちゃうんだもん。最後まで見る楽しみが半減しちゃうでしょ」

「じゃあ、ほとんど毎晩の戯れとかも、迷惑なの」

オレは上目で彼女の顔を伺う。まどかは顎を少し引き、目尻を染めた。

「め、迷惑なんかじゃないよ……」

「なら、もう一回いいよな。ああ、一回と言わず……」

オレは体を起こして彼女ににじり寄る。

「え……ま、また?! ていうか、まだ?!」

「オレ、おまえとだったらオールドパーの記録塗り替えられるよ」

オレは顔を傾け、まどかの首筋に歯をたてる。片手で腰をぐっと引き寄せて……

「えええ！ そんなの更新しなくていいです！！ やっ……こら……  
……もー！！ ショコラ！ 伏せっ！！」  
「……！！」

条件反射とはかくも恐ろしい……気がつけばオレは体を低くし、  
鼻をまどかの腹に埋めていた。オレはちらと彼女を見上げる。

「ぷっ……くっ……」

まどかは自分の上にひれ伏し、微動だにしないオレを見ながら両  
手で口を覆い、肩を震わせて必死に笑いを堪<sup>こら</sup>えている。

「おまえ……それ、オレに挑戦してる？」

オレは彼女を下から一にらみすると、一瞬まどかの顔が強ばった。

「え……そんなこと……きゃあ！」

オレは彼女に覆いかぶさる。もう、手加減はナシだ。舐め尽くし  
て、吸い尽くす。余すところ無く、一滴も残さず。

バーシス最高長官司令室には朝の光がたつぷり入り込んでいる。  
薄暗い廊下を通って来たので、目が慣れるまでオレは何度か瞬きを  
しなければいけなかった。

デスクの上に肘をつきながら、顎を預けて目を細めるシヤム。ミ  
ケシユがそのデスクの脇に控えている。その顔には”やれやれ”と  
いう表情がありありと見て取れる。

シヤムがオレのパルスを差し出し、オレはそいつを引ったくる。

「よかったな……薬効いたようで。で、楽しかった？ 犬ライフ」

「楽しいわけねーだろ」

まあ、部分的にオイシいところも無かったわけではないが、認め  
ると癪だからそこは適当にスルー！

「長官……、ヒドいですよ……騙すなんて」

まどか、そのトーン、怒り含んでないだろ。シヤムは依然、すとぼけた顔をしながら

「いやあ〜、ほら、君たちもそろそろ倦怠期かなとか思つて。普段とちよつと違う事をして刺激を与えないとね！ 上司はいつでも君たちの幸せを祈つて……」

「違い過ぎだろっ！ まー、過ぎたことはいい。オレのミスでもあるわけだ」

「おお、さすがにルイは物わかりがいいな！」

「バカな上司を持つと部下は嫌でも成長するという定石だな」

「あの、ここ笑うところでしょうか」

ミケシュがシヤムに確認する。まどかがオレの後ろに隠れる。その、シャツをつまんでいる手が細かく震えている。堪えなくてもいいぞ？

「まあコントはこれくらいにして、単刀直入にいう。オレは今日から三週間の休暇に入る」

これにはシヤムも慌てて身を乗り出した。

「えええ！ ムリ！ 今、書き入れ時なんだぞ?! おまえが今抜けてどうするよ?!」

「知るか。もつと技術者増やせ。だいたい、二三年前からずっと”書き入れ時”のようだが、バーシスの運営状態はあまり変わってないようだしな」

こほん

ミケシュのこめかみに青筋が見えるのは気のせいか。

「まあ、とにかくそういうことだ」

シヤムは腕を組み、眉間にしわを寄せながらもしぶしぶと休暇要請を飲んだ。

「あ、まどかちよつと来なさい」

シヤムが思い出したようにデスクの中から何かを取り出した。そしてオレの後ろから出て来た彼女に「手を出して」と指示。

「ハイ」

シヤムは赤いカプセルが一粒入ったケースをまどかの手のひらに置いた。

「これは……？」

シヤムは人差し指をちょいちょい、と自分の方へ向け、顔を近づけたまどかに耳打ちした。

嫌な感じだ。

まどかの顔に一瞬動揺が浮かんだが、すぐに口角に笑みが乗った。シヤムは満足そうに椅子に反り返ると、ご機嫌な声で

「じゃ、おまえたちの用事は済んだな。行っていいよ。それでは楽しい蜜月期を！」

手のひらを俺たちの方に、顔の高さで上げた。

ほんつとに調子のいいヤツだ。

「なんだって？ それ」

部屋を出た直後、カプセルが何なのか、なんとなく想像はつくが一応聞いた。

まどかは手の上のケースに目を落とし、微笑む。

「えー、なんてことないお守りだって。犬神様の。ルイが言う事を聞かないときに使いなさいって」

ふん、何が犬神だ。

「あ、オレ、シヤムに休暇中船を使っていいか聞くの忘れた。すぐに済むけど……先に下に行ってるか？」

「ううん、待ってる」

オレは彼女の手を取り、長官室まで戻る。

部屋に入ると二人の姿が見えないのに訝いぶかしんだ。が、すぐに隣接する応接室から二人の声が漏れて来たので、耳をそばだてた。

「あの中身、ただのビタミン剤なんだよね〜。でもプラセボで犬になっただらそれはそれですごいけどなあ」

「長官……それ、悪趣味過ぎやしませんか？ まあ、今に始まった事じゃありませんけどね」

「何？ ミケシユ、なんか言った？」

「いえ……何も」

「ま、ルイも無事元に戻ったし、二人の雰囲気も嫌になるくらいさらに良くなったようだし。こっちはバイオウエポンが入ったわけだ。終わりよければ全てよし、ってこのことだな」

「はあ……」

オレは二人に気がつかれないようにそつと部屋を出た。外で待っていたまどかと視線が合う。

「どう？ 使っていいって？」

「ん……自由に使っていいってさ」

「よかったー」

ふん、オレがバーシスの船を勝手に乗り回してもシヤムに文句が言えた義理は無いだろ。オレがわざわざ断るまでもないんだ。

「なあ、まずどこに行こうか。おまえの行きたいところ、どこでも連れて行ってやるよ」

「嬉しい。じゃあね……あ、私に操作させてくれる？ 私がル

イを好きなのところに連れて行ってあげる」

「おまえが？」

「私、ザンク・イネアに一人で飛んだこともあるんですけど」

「そうだったな。じゃあ、任せるよ」

「やった！」

オレはまどかの肩に腕を回し、その体を引き寄せる。

オレは、おまえが経験値を上げてオレから離れて行く事を恐れているのかもしれない。どんだけ心配性なの、オレ。まあ、それだけま

どかを離したくないってことなんだけど。

「おい」

「ん？」

彼女が顔を向けた拍子にふわりと、オレと同じシャンプーの香りが鼻をくすぐった。

その瞬間、言うまでもなくオレの視界はバラ色に。

「オレを、置いて行くなよ」

(完)

#### 第四話 You are the one (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。

Elysumから抜けきれない小生の短編となりましたが、お楽しみいただけたでしょうか。

次回はさらに磨きをかけた作品をお披露目出来るよう、日々精進して参ります。

高宮 かしお

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9235t/>

---

You are the one

2011年9月25日13時28分発行